

阪大オペラ20周年を顧みて I

大川創業株式会社 名誉顧問
阪大オペラ ディレクター

大川 進 一 郎

昨年も阪大吹田キャンパス内のコンベンションホールで、8月31日(土)、9月1日(日)の2日間に亘り行われた、阪大工業会主催の阪大オペラシリーズ。昨年はヨハン・シュトラウスⅡ作曲の「ツイゴイナー男爵(ジブシー男爵)」を上演したが、2日間とも立見がチラホラ出る、500席が満席の大盛況で、ホールから出てくる顔は皆笑顔。口々に「良かった・良かった。」「今年は最高や。」と私の席へ立ち寄り、声を掛ける人で列ができた。昨年初めて阪大オペラを鑑賞した妹夫妻は「兄ちゃん、良い事やってるんやね。北海道の姉ちゃんにも報告しとく。来年もまた来るわ。」と妹。

家では家内にボロクソに言われている私の姿を見ているだけに、阪大オペラが強烈に焼き付いたのであろう。

今から20年余り前、阪大工業会会長鈴木 胖先生の一言から阪大オペラは始まった。当時、工業会の企画委員だった私たち数名の前で、鈴木委員長が「企画会議、たまには北新地の小粋な店でやろうよ」と、当時事務局があった近鉄ビルの向いのビルの地下の小料理屋で初めて食事をご馳走になった席上、次のような話が出た。

この度、文化庁が阪大の為に、吹田キャンパスに500人収容できるホールを建ててくれたが、地域社会に開かれた大学だとPRするべく、ノーベル賞級の立派な先生が講演しても、たった24名しか集まらない。折角できたコンベンションホール。何かもっと人を集める良い方法はないものかな。と全員を見渡された。無言の重い空気が数分続いた後、私は「ハイ」と挙手し「オペラを上演すれば500名集まります」と大口を叩いた。「じゃあ君がやってくれ」と言われて始めた阪大オペラも今年で20年目を迎えた。

始めた当時は、20年務めた赤字の関西フィルの楽団代表を辞任してホッとしたのも束の間、今度は再三再四辞退し続けてきた関西オペラ協会の後援会(関西芸術文化協会)の理事長を引き受けて欲しいと、関西音楽界のドン野口幸助氏に、頭を床にこすらんばかりに口説かれ、次の立派な方が決まるまでという条件付きでお引き受けしたところであった。

オーケストラしか知らない、オペラは年に1度観るかどうかの私が理事長になるなんて。チンプンカンプンの理事会に出席して分かった事は、大舞台に莫大な費用が掛かり、年間3千万円以上に及ぶ国からの援助がなければオペラは上演できないという事。主役歌手になりたいと思えば、実力だけでなく、1万円のチケット500枚売るといふノルマが付いてくる。つまり、素晴らしい歌声でも大金持ちの家系か、自分が商売で成功して500枚のチケットを売りさばく力があるか。プラシド・ドミンゴ(三大テナー)のように人気があってチケットがすぐ

完売するような有名な歌手しか主役になれない。私は「野口先生!チケットのノルマを売りさばかないと、いくらオーディションで1位だと言っても主役になれないのですか?」と尋ねると、「チケットを売るのも実力の内です」と野口先生。例えいくらノルマを達成しても、有料で来てくれるお客はせいぜい700名だという事も知った。そんな中、無謀にも500人席を満席に見せると啖呵を切った以上、やらねばならない。しかも、お客様無料、出演料も無料なら、ホールはタダで貸します。という条件付き。従って、オーケストラを導入すると、通常200万円以上かかる。しかし、これをタダにしなければならぬ。だから、私が当時所属していたAPA(アマチュア・プレイヤーズ・アソシエーション)に協力を依頼した。歌手は、音大卒でも前述の理由でプロになれない。一生に一度で良いから、オーケストラをバックにアリアを歌いたいという希望者は大勢いる。それらを上手く活用すれば何とかなる。と楽観的な性格の私は、周囲の多くの人にボランティアを強いながら、20年が過ぎた。ここ数年、本番は500人席が満席である。予想を馬鹿にしてはならない。

オケも、当初はアマオケなので全員アマチュア。上手な人もいれば下手な人もいたが、誰ひとり辞めさせられない。歌手も、途中で声が出なくなった素人もいたが、今では、弦楽器奏者は各アマオケのトップクラス、管楽器奏者は音大卒と、関西のどの楽団よりも優秀な人が集まっているので、本人たちも自分のオケに所属するメンバーより上手な人と演奏しているので、やっていて楽しい。空きを待っているパートも出てきた。普段は演奏しないオペラを、関西フィルコンサートマスターのギオルギ・バブアゼ氏の指揮の下、サブコンマスの友永氏から無料でプロの技を習得できるので、楽しくて仕方がない。

歌手も、普段はピアノ伴奏だけでアリアを歌っているが、阪大オペラでは、ネックだったチケットノルマ無し、おまけにトップアマ集団のオーケストラをバックに全曲を歌う事ができる。ノーギャラでも、ボランティアで歌ってくれる。最近では、自身のプロフィールに「阪大オペラに出演」と明記する人が出るまでになった。

しかし、この20年間、工業会から多大なご支援と大々的なPRをして頂いたからこそ、これまで続けて来られたと感謝の思いでいっぱいです。今回、このような回顧録を執筆するのも、過去の担当教授原 茂太先生をはじめ、他の先生方からの要望があったので、貴重な誌面を拝借し、どのようにして2日間も満席が続いたのかの裏話をして、皆さんの参考にして頂きたいと考え出稿することにしましたので、しばらくお付き合いください。

さて、安請け合いをしたものの、オペラの事は未だ理事長になったばかり。そこで、関西歌劇団の理事をされたこともあり、今は大阪オペラ協会を運営されている布笠先生に相談に行った。布笠先生とは、彼が経営されていたイタリアンレストランをミニコンサートで度々お借りしたり、関西フィルのコンマス、ギオルギ・バプアゼ氏とチェロ奏者のギアさんを引き受けた仲。早速話を切り出すと、先生も音楽教育の一環で、姫路で高校の講師をされている篠原さんという方が、モーツァルトの「フィガロの結婚」をやりたいので、歌手を集めて欲しいと言われたところだった。オケをバックなら最高だ。アマチュアだから出演料は出せないが、交通費は出す。という事で、とんとん拍子に決まった。私の記憶にはないが、記録には「大阪大学工業会主催 第1回音楽会」1999年8月1日コンベンションセンターMOホールとある。キャストの中に関西だけでなく日本中で有名なソプラノ歌手で大阪音大教授の並河寿美先生が無料で出演して下さっている。他にも今や関西歌劇団の看板テナー清原邦仁氏、音大講師で今年のツイゴイナー男爵にホモナイ伯爵で出演頂いた滝川千春氏などが名を連ねている。指揮は今年総監督の布笠秀昉とある。驚きだ。オケのAPAのメンバーに“特別出演 トビリシ弦楽四重奏団”とある。その中に、現関西フィルのコンサートマスター ギオルギ・バプアゼさんと首席チェロ奏者だったギアさんが入っている。アマオケのAPAだけではオペラは無理だという事を示している。

第2回はヨハン・シュトラウスⅡの「こうもり」(01年8月5日)。今年の「ツイゴイナー男爵」バリカ役角地正直氏のお兄さん、角地正範氏がアルフレード役。兄弟ともに主役級。そういえば、家族全員声楽家だ。指揮は河崎聡氏が振っている。やはり、オペラだけでなくオケにも振れる指揮者が必要と見たのだろう。彼は後にロシアの国立リムスキーコルサコフ音楽院指揮科に3年間留学、今では関西フィルをはじめ多くのオケを指揮され、クラシック、オペラ、バレエ公演と幅広く活躍されている。オケの指揮者とバレエの指揮者では振り方が違う。オケのように先々とタクトを振られてしまうと、ダンサーは次々に足を傷めてしまう。ダンサーの足が舞台についてから振るくらいでないといけない。ダンサーの動きを見て、それにオケを合わせるように音を出さねばならないから、「俺について来い」型の指揮者ではバレエの指揮は務まらない。従って、バレエ指揮者は数が少ない。いつも東京からバレエ指揮者がやってくる。大阪でも育てたいとバレエ団団長は常々考えている。私はこれまで大阪出身の有名な女性指揮者でロシアのオケとよく共演する指揮者や、ブルガリアの首席客演指揮者と称し、コーラスや独奏奏者を連れ海外公演をしている指揮者など多くの指揮者を、当時日本バレエ協会関西支部長だった故安積由高氏に紹介し、見てきた。一見すると華やかだが、バレエ指揮者として大成している者はいない。それほどバレエ指揮者は難しいのである。

第3回(02年8月4日)はAPAの全国大会とコンベンションセンターの予約日が重なり、結局オペラは開催できなかった。オケのみのシューベルト「未完成交響曲」公

演となった。コンベンションセンターMOホールは3年先まで抑えておかないと予約できない事がよく解った。現在は2023年まで予約している。キャストは殆ど本番が決まった時点で決まるが、今年のツイゴイナー男爵は11月まで決定が遅れた。500万円も出さない代りにキャストが変更になることがたまにある。

第4回はヴェルディの「椿姫」(03年8月24日)。オペラ界で最も多く上演されるのは何かと訊ねると、イタリア人は「椿姫」、スペイン人は「カルメン」と答える。

日本の結婚式では、必ずと言っていい程「乾杯の歌」を歌うから、イタリア人は強気だ。

そのキャストを見ると、清原邦仁、竹内直樹以外に現在も活躍されている歌手は見当たらない。ヴィオレッタの梅谷裕子は、今も私が後援会の会長を務めて、毎年帝国ホテルでディナーショーを開いている。300人を超える観客が毎年減ることはない。私達の阪大オペラシリーズより1年遅れてスタートし、来年が20周年だ。亭主はフルートの名手で、ヴィエールフィルハーモニーで前後して吹いていた。宇宿允人の棒が解からず、どこで音を出せばよいかよく教えてもらった。クラシックは暮らし苦だと言ってヴィエールを飛び出し、小林幸子の「思い出酒」を作曲して一大人気となったが、「大川さん、歌謡曲はヒット曲2曲作れば儲かるが、1曲では宣伝費が高むからトントン」と嘆いていたが、私が手ほどきした超能力法をものにして、全国に社内教育の講師として招かれている。梅谷裕子はその妻である。裕子は元NHKのアナウンサーだけあって、マイクを持たせればどの演歌歌手より上手だが、オペラ歌手としては少し声量が足りない。オペラ歌手に声量の少ない歌手はマイクを使えば美空ひばりに匹敵する演歌歌手が生まれると思うのに、儲からないクラシックばかり歌っている。

第5回はモーツァルトの「魔笛」(04年8月8日)。夜の女王はソプラノより高いリリコ・ソプラノの音域まで出さなくてはいけない。結局お手上げしてコーラスを指導されていた、声楽家の松尾久美子氏に丸投げした。副指揮者には宮嶋秀郎氏を起用した。彼は将来ヨーロッパで指揮者として名を馳せたい。と言っていた。従って、棒を振りたくて仕方がない。河崎氏の振れない時に振ってもらったところ、高言するだけあって上手い。今ではオペラ指揮者、コレペティトアとして、オーストリアやチェコを中心にご活躍されている。見事に夢を実現された。

(電気 昭和32年卒)